

国語

■ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人はみな、赤ちゃんとしてこの世に生まれ、子どもとして育ち、やがて大人になって生きてきました。その間に種々の能力を発達させていくということ自体は、今も昔も変わりません。しかしその「発達」がそれとして取り沙汰されるようになったのはそれほど昔のことではありません。実際、子どもの発達が問題になってくるについては、それなりの歴史的な背景がありました。

① 人類の歴史は四〇〇万年とも五〇〇万年とも言われていますが、そのうちの大半の人々は自然発生的な共同体を軸にして狩猟サイシユウによる生活を営んできました。② フォン・ユクスキュルに言わせれば、それは人々が「自然の計画」にくるまれて生きてきた時代でした。その後、人間はこの自然の計画から抜け出し、農業や牧畜をはじめること③ で、言わば「人間の計画」によって生活を設計しはじめることとなりますが、それはA 一万年前のことですし、さらに言えばこの農耕牧畜が安定して人々の生き方の中心を担うようになるのは、地域によっていろいろ差はありますが、だいたいにおいてここ約千年から数千年のことにすぎません。

③ いずれにしても土地をキバン^③においたこの農耕牧畜社会が、ほんの二〇〇―三〇〇年前まで、世界の大半をおおっていたのです。そこでは一部の王侯、貴族、武士などの特権階級を別にすれば、人はその生まれた共同体にしばらくいて、そこから出ることなく生きてきました。それは言わば宿命の共同体であり、ほとんどの人々はこの点に関して選択の可能性を与えられていませんでした。ですから、そこでの生活は与えられた、選べないものとしてありましたし、そこでの子どもの育ちもまた同じように、あれかこれかと言うふうを選ぶものではなかったはずです。④ そういう時代にも、もちろん親は子どもを慈しみ、子どもの無事な成長を祈ったことでしょう。しかし、今日のようなかたちで子どもを子どもとして取り出し、その将来を案じて、その育ち自体を問題として

論じることにはなかったのです。子どもの将来の選択肢が広がり、それによって子どもの育ちへの関心が一般化ようになるのは、世界史的に見てもまだごく新しいことにすぎません。

一八世紀の後半、ルソーは『エミール』のなかで次のように書いています。

人は子どもというものを知らない。子どもについてまちがった観念をもっているので、議論を進めれば進めるほど迷路にはいりこむ。このうえなく賢明な人々でさえ、大人が知らなければならぬことに熱中して、子どもが何を学べるかを考えない。かれらは子どものうちに大人をもとめ、大人になるまえの子どもがどう言うものであるかを考えない。

このルソーの言葉は、今日「子どもの発見」^⑤を印しづける重大な宣言として評価されています。じつさい、ルソーがここで子どもは小さな大人ではないとして、「子どもの自然」を主張した背景には、頹落した大人たちの文化への痛烈な批判が込められていました。しかし他方で、彼がこのように子どもを子ども自体として取り出し、その成長を追ってみようとしたその背後には、そのころすでに流動しはじめていた時代状況があったものと思われまゝ。B イギリスでは産業革命がポツコウしはじめていました。

農耕牧畜を軸にしていたころ、人々の生活は共同体のなかに言わば埋め込まれていました。そこから個人が取り出されてくるについては、産業構造の組み替えと、それにとりもなう共同体組織の流動がなければなりません。土地に結びついたそれまでの共同体を離れて人々が工場労働者になっていくとき、そこではじめて、むき出しの個人が自分の労働能力を賃金に換えて生きるという新しい生き方が誕生します。言わば「稼いで食う」という生き方です。今日ではこれがきわめて一般的な生き方であるかのよう

に錯覚されていますが、あらためて考えてみると、それはまだせいぜい二〇〇年の歴史をもつにすぎません。それにしてもこの「稼いで食う」生き方の登場は、人々に大変な変化を与えることになります。第一に、稼ぎの単位が個人になり、基本的にその個人のもつ能力が問題になります。第二に、そうした生き方が一般的になった社会では、子どもは親の仕事を引き継ぐのではなく、大きくなれば親とは別に新たな職場をおのおの見つけなければなりません。そしてそのとき問われるのが、そ

の子どもがどのような能力をもっているかです。その結果として、第三に、子どもの育つ過程が意識的な学習の過程として取り出されてくることになります。

親を含む共同体的な生き方を越えて、子どもを個体として取り出し、その能力の発達を意識的に促していくという発達観の登場は、人類史のうえでよかれあしかれ画期的な出来事でした。そしてこの発達観を體現したのが、組織的体系的な教育―学習機関としての学校でした。学校という組織は、産業発展を求める国家の側の要請として生まれると同時に、他方で子どもを育てる親の側の要請によって支えられてきました。C子どもがどのような能力をどれだけ身につけていくかで、子ども自身の将来の生き方が決まるような時代になってきたのです。

子どもの「発達」が取り出されてくる背景には、このような時代状況がありました。二〇〇年余りまえルソーの「子どもの発見」にはじまり、この二〇世紀初頭エレン・ケイの「子どもの世紀」という主張につながってきた子ども中心主義の背後には、⑦皮肉なことに個体能力次第で人生の成功失敗が左右されてしまうという種類の社会思想が胚胎していたのです。

我が国に関して言えば、第一次産業がまだ優勢を始めていた一九六〇年代前後まで、共同体の流動はまだ限られており、多くの子どもたちはまだその生まれ育った共同体の枠内で、選択肢の限られた生き方を強いられました。しかし、いわゆる高度経済成長政策のもと、産業構造が第二次、第三次産業へと大きく動いていくなかで、子どもたちのDは、より多く稼いでより豊かに食うという方向に大きくなびいてきました。例えば私自身、この時代の変わり目に学校時代をすごしてきました。親たちと一緒に兄弟姉妹が野良に出ていた子ども時代から、すつと抜け出して都市生活に入っていた、その私たちの生活史の曲がり角自身が、同時に日本の歴史の曲がり角にピタリとかさなっていたのです。

そうして、E現にほとんどの人々がより多くを稼ぎ、より豊かに食うことができました。生きる選択肢も、一見ひろがってきたように見えます。しかし他方で、学歴主義を推し進め、「発達」への意識を過度に高めたのも、同じその時代思想でした。そして障害をもつ子どもたちへの障害克服や発達への願いも、実のところ、多分にそうした時代思想からはみ出すことへの不安に根差していたことは否定することができません。

「発達」が、学者や研究者などの専門家を越えて、一般の人々の口の端にのぼるようになったのが、こうした時代状況の延長上のことであることを、ここではひとまず確認しておかねばなりません。

（浜田寿美男「Ⅳ 発達心理学の課題」『発達心理学入門』による）

（注1） フォン・ユクスキュル＝ドイツの生物学者、哲学者（一八六九～一九四四）。

（注2） エレン・ケイ＝スウェーデンの社会思想家、教育学者（一八四九～一九二六）。

〔解答は解答用紙の所定の欄に記入しなさい。〕

問一 筆者が、本文で用いている文体は、文末が「です・ます」という敬体で書かれているが、これに対し、文末に「だ・である」を用いている文体を何というか、漢字二字で書きなさい。

問二 ☐ A B C Eに入る語句は何か、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、その番号を書きなさい。（同じ番号は二度以上選ばないこと。）

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|
| 1 | おりしも | 2 | たかだか | 3 | なるほど | 4 | ちかぢか | 5 | なにしろ |
|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|

問三 傍線②「言わば」の品詞として最も適当なものを次の中から選び、その番号を書きなさい。

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|----|---|----|---|-----|
| 1 | 接続詞 | 2 | 副詞 | 3 | 名詞 | 4 | 連体詞 |
|---|-----|---|----|---|----|---|-----|

問四 傍線⑦「皮肉なことに」とあるが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、その番号を書きなさい。

- 1 子ども中心主義も、能力によって子どもを選別する前近代的な社会思想の萌芽をもたらしたから。
- 2 子ども中心主義も、子どもを過酷な競争に追い込む過激な社会思想を止められなかったから。
- 3 子ども中心主義も、過酷な競争を子どもに強いる大人中心の社会思想となってしまったから。
- 4 子ども中心主義も、能力の選別を通して子どもを抑圧する社会思想を含み持っていたから。

問五 Dに入る漢字三字の語を本文中より抜き出さない。

問六 傍線⑨「曲がり角」と同じ意味の語句を本文中より抜き出さない。

問七 本文の趣旨として**適当でないもの**を次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 近代以降の学校教育の発展は、共同体からの個人の解放による人生選択の幅の拡大を背景としている。
- 2 近代教育思想における発達観は、個体としての能力観と学歴社会の発展によって生み出されてきた。
- 3 近代における学校成立の背景には、産業発展を求める国家や子どもの将来を案ずる親からの要請があった。
- 4 個体としての能力観は、奇しくも過度の発達への意識を高め、学歴社会を押し進めることとなった。

問八 傍線①③④⑥⑧のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直さない。文字は大きく鮮明に書きなさい。

問九 傍線⑤「子どもの発見」とはどういうことか、本文中のルソー『エミール』の引用文を踏まえて、三十字以内で説明しなさい。
い。(句読点・符号も一字として数える。)